中山義秀全集

第一卷

厚物咲
碑(いしぶみ)
出郷記
秋風 他

新潮社版

中山義秀全集

第一卷

新潮社版

© Tetsuya AKada, Reiko Yamamoto and
Himeko Nakayama, 1971, Printed in Japan.

中山義秀全集　第一巻

發　行　昭和四十六年七月十日
セット版　昭和五十一年八月三十日
セット定價　二七〇〇〇圓

著　者　中山義秀
發行者　佐藤亮一
發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七一、電話
業務東京二六六―五一一一、編
集二六六―五四一一、郵便番號
一六二、振替東京四―八〇八

印刷所　塚田印刷株式會社
製本所　神田加藤製本

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
擔にてお取替へいたします。

中山義秀全集第一巻　目次

穴　七
お仙　一四
鐵路　三一
合戰　三一
六月のフール　四四
捕虜奪還　四八
北國　五七
少年坑夫の離れ業　六三
櫻の園　六八
湖　八一
娘の家　九〇
別離　一〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

魔物　一一三
教師の態度　一一八
餘つた日常　一三三
月夜の船　一四六
青霧　一六〇
原物と怪物　一六九
乾氏の秤　一八三
爭多き日　二二二
榮耀　二三六
厚物咲　二五五
藁　二七九
二僧侶　三〇〇

山師　三〇七
碑　三四三
出郷記　三七八
花に臥て　四一六
秋風　四一八
波の上　四四〇
なかばは流浪に　四六四
柔い蠟　四七二
醜の花　四九二
*
解説　中村光夫　五三一
編集後記・解題　五三一

中山義秀全集　第一卷

穴

海から陸つた彼は、冷たさに感覺を失ひかけてゐる兩踵を女の腰にのせて、長ながと沙上に寢た。體が頻に顫へる。熱沙が鳥肌になつた皮膚に氣持よく焦げついてきて、軈てじわじわと粗い感觸にまで溶け込んでゆく。

健康と疲勞と休息との交錯に快い倦怠を釀し出されて、彼は眼を瞑つた。——瞬間、もやもやと闇が罩めてきて、じいーんと沈默つた眼底に光が青と紫との羅布を飜して舞ふ。巨人の呼吸するやうな伴奏が磯濤から傳つて來る。その朦朧と微睡との境に、童形の女神が偶と現れ出た。爽やかな碧い眸を擧げて、凝乎と彼を瞶める——が、微笑はない。澄んだ象牙に刻み込んだやうな貴い顏である。豐かな頭髮は茶色の海水帽で裹まれ、その紐の締りは夢を孕む細ながい眉を些し斜に吊りあげてゐる。黑色の水着から溶け出た蟻細工の纖弱な四肢は、乳色に透きとほつて、旬の湖心に浮動する……女神ではない、彼女だ！

彼はふと息して眼を睜いた。徐かに蒼空が廻轉してゐる。彼等の側に峙つた漁船は、烈しい太陽の直射を遮つて、廣い濱邊の裡に唯一の影のオアシスを造る。體溫を恢復した踵は、水着の上から女の腰部の肉の彈力と蠢きとを感じた。

濕つた眸で、彼は女を見た。青味を帶びた肉團が海豹のやうに寢そべつて、或る動物の纖細な毛並にみられる、とろりとした鈍光を放ちながら、一つの脈搏に息づいてゐる。

「もう歸れ」

彼は踵で女の腰を押した。組んだ兩腕の中から、女は懶さうに顏を擧げた。

「陽に灼けて終ふぞ」

女は怪訝な眸附で彼を瞶めた。

「構ひやしないわ」

「嘘吐け……」

無言で女は再び顏を腕に埋めた。熱の喘ぎに、逞しい胸部が新しく波うち始めた。

嫌惡の波紋が、微に圈を描いて、彼の裡に擴がつてくる。

「執拗な女だ。壁蝨のやうに喰ひ附いて俺から生命と光とを奪つて終ふ——」

頸を廻して、彼は海の方を瞶めた。桃色に日灼けた女の群が張り切つた四肢を躍らせて、ニムフのやうに、磯濤の間に隱現してゐる。一人一人がみな輝やかしい。海の悅びに溺れてゐるのだ。躍進と潑剌との純新な享樂の生活！孤獨と自由とを希ふ念が、生々と彼の胸に甦つてくる。

彼は踵に力を容れた。

「俺の方から此女の手を握つたのでなかつたならば——俺といふ人間の病的な肉欲の醜骸を、無智な彼女の記憶に握られて終はなかつたならば……」

弱々しく彼は呟きを繰返した。空想が、呪はしい女の存在を海の遠くへ蹴飛ばして遣る刹那の快感に、彼の心を顫はせる。けれど直ぐ其後から取返しのつかない後悔を積んだ寂寥の船が彼の胸に音もなく滑り込んで來る。毎もの諦めに似た空洞の氣持で再び彼は眼を瞑つた……

それからいく度時が羽ばたきして過ぎたか。現に彼は賑やかな笑聲を聞いた。動悸が素早く蠶を顫はす。踵を外すと彼は肘を立てて向き直つた。沙濱に寢轉んでゐた人々の視線がいち樣に脫衣場の方向に放たれてゐる。

「彼女が來たのだ」と彼は直覺した。

待たれたる者よ！　戀の女神像よ！　夢を支配し、祕めたる焦思に情熱を囚へるそれは暗の幻影、わが光の幻影なのだ——それを今、俺は現實に見ようとする！

白光の中に、丘の脫衣場の踏段を、彼女等姉妹は登る。旅館の番頭が、包を持つて、今日も矢張扈從してゐる。周圍の凡べての存在が象を消して終つた——白日の祭壇を振鈴を鳴らして風のやうに過ぐる、影なき者の囁きによつて……

彼は恍然として彼女をのみ——十六歲の乙女をのみ、消魂の凝視にあかず見成る。或る期待と緊張とに彼の心臟は折々に衝動する。と、什をだ。後から四五人の男達が、どやどやと跟いて現れて來たではないか。頭髮を眞中からきつちりと分けた者や變り模樣の浴衣を伊達に着た者、鼈甲緣の眼鏡をかけた、學生風の青年達が——此事は每もとは違ふ！

不吉な豫感に心臟が冷たく縮む。

さうだ。不遠慮な笑聲は、彼等の中から生れる。先からの續きらしい巫山戲を、此男達は女神を對手に行つてゐるのだ！

彼女の姉が、羞しげに後を向いて衣服を脫ぎかけた。欄下に止つてゐた青年達は、一齊に躍りあがつて喝采する。番頭が周章てて彼女から着物を受けとる。くつきりと肢體の線を描き出す水着姿になつた彼女の姉は、場内の隅に蹲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

んで終つた。獣的な笑と言葉とが、男達の口を相次いで出る。喧騒の渦の中に、姉妹は鏡臺に向つて刷毛をとつた。

「いよう――たをやか！」

變り浴衣の男が手を振つて咆哮した。それに伴れて彼等は哄つと笑ふ。

竟に妹は、辛棒し切れなくなつたといふ風に手早く化粧を濟ますと、欄の所に飛んできて何事か叫んだ。男達は一層喜んで囃し立てる。一人が不意に彼女の手を把らうとして失敗つた。乙女は拳を擧げた。頭髪を分けた男が、傍からつと寄つて、素早く一方の手を捉へると下に曳張つた。蹌踉めいて彼女の上半身は欄の外へ滑り出る。眼鏡の男が兩手で彼女の顏を抑へると、おお、何とした事ぞ！　乙女は羞恥と不意の愕きとで眞紅になつた。强ひて把られた手を振拂ふと、危く接吻から免れて、にやにやしてゐる眼鏡の男を、平手でぴしやりと打つ。

哄笑が、息をしづめて覗てゐた沙上の人々から、盛り上つた。

氣味よく顏を打たれた男は、眼鏡が何處かへけし飛んで終つたのも忘れた程亢奮して、腕まくりすると、猪のやうな勢で欄に飛びつく身構をした……

が、血の潮した唇から、星のやうに、米粒に似た齒並をちらつかせてゐる、勝利と滿足とに頰を火熱らした乙女は、欄の內部に立ちはだかつて、偖て、此から怎うしようとするのであるか！

己れ一人に注がれた環視の裡に、ステーヂに立つたスタアの誇りを抱いて、聲を立てて笑ひ、のぼせ上つて、其のしなやかな拳を惜し氣もなく、男達のあぶら頭や粗剛な肩の上に、加へようとでもするのであるか！

現實は一切の結末をつける。

唇をひき歪めて睜いた眼に、彼はみ度くないものを明瞭りと觀た。

幻影の殿堂は壞れ、愚かしい夢を裹んだ卵の殼は二つに割れた。彼の心は全く或る一つの物に凝結して、他の總てを振り落さうとする……

彼は起ち上ると人々に背を向けて、波止場の方へ、大股に歩き出した。青色の海豹が、息を切らして後を趁つて來る。恐怖の鞭に逐ひたてられでもするやうに彼は竟にいつ散に駈け出した。疾走が彼に力を與へた。

波止場の突端まで來ると彼は背後を振顧つた。膨れるだけ膨れあがつて、むつちりと締つた肉の生き物が、ちよくちよくと短い脚を運ばして防波堤の上を駈けて來る。憎惡と侮蔑とに險しくなつた眼で彼は女の前部に當られたタオ

ルが白く風に靡くのを瞶めてゐたが、忽ちくるりと海面にむき直つて、石疊の上に確かりと兩膝を抱いた。

女は彼の背後に近づくと、聲音を止めた。忍ばせた女の荒い息使ひが響いて來る。

「淫欲の豚奴が……眼隱でもしやがつたら張り倒してやるから」

女は呼吸を抑へて待つてゐた。然し、さうした男の不機嫌に氣附いたのか、女は何事もなく、密つと男の側に寄つて來て坐つた。男の黑い干物のやうに堅い肩と、女の妙に濕つぽい餅の如うに粘る體とが擦れあふ。女の體の靠れが强まるに伴れて彼は漸次に自身の體が横に撓むやうに感じて、息苦しくなつた。

彼は絕えず女の體重に抵抗し乍ら、魔女の如うな彼女の肉の執拗さに身顫した。偶と、遽かに全身の血潮が波立つて、挫かれた情熱の渦卷が驕兒の憤懣にまで躍り出ようとする。けれど一方からはまた臆病な寂寥が白い手を展して、何事も諦めの搖籃に留まつて呉れるやうに縋り附いて來る。そして其結局は吐き口を塞がれた狂熱が、犧牲者を搜めて血の喘ぎに他の體内を暴れ廻るのだ。——何者でもいい、思ふ儘自己の力で破壞してみ度い、と絕えず物凄く喘ぎながら……

彼の顏は土氣色に斑ちた。

「なぜさう押すのだ、莫迦奴！」

彼は顏を顰めて、女の肩を突き遣つた。然し女は、彼の憤りに無頓著らしく、俄かに惡戲兒らしい笑聲をたてた。

「だつて……」

それから彼女は、唇を曲げて媚態をすると背後を振むいた。

彼は愕いて首を捻つた。何時の間に其處に來てゐたのか、百姓風の若者が唇をだらしなく開けて、積石の蔭から熱心に此方を瞶めてゐる。

彼の視線に出會ふと若者は狼狽して眼を逸した。ぎごちのない動作で四邊を見廻し、直ぐまた眼を俯せて徘徊き始める——

彼は思はずにやりとして女と顏を見合せた。突き詰めた心の凝結が一時に溶解して、期待に對する明い光が閃く。力の搜めた方向が發見つたのだ。若者の間の拔けた動作が、そして彼等兩人を竊に瞶めてゐた若者の心理に對する洞察が、彼に突然或る愉快な遊戲を暗示したのである。

彼は企ての結果を豫想して、恐悅に生き生きとなつた——

「死ぬ程水を喰はしてやれ」

烈しい力で女の體を抱き緊めると、男は、充血してくづれ落ちさうになつてゐる彼女の唇に接吻した。

豫期してゐなかつた愛撫に女はびくりとして、少時動悸を高めたらしかつたが、男の上機嫌を知ると同時に彼が顔を顰めた程の勢で彼の頸に兩腕を卷きつけて來た……

或る惡狡い微笑に眸を輝やかし乍ら、彼は女の顎を右手で支へると其儘左の方へ廻した。

「なあ、おい、彼處から飛び込んでみないか」

女は快活に、示された方向を見た。小型の工事用の起重機が、水面に臨んで据ゑられてある。

「あの臺からさ。どうだ、腕を組み合つて飛び込むのだ。いいだらう?」

急に女は肩を窄めて、烈しく首を掉つた。彼は更に女の乳まで手を展して、抱擁に力を容れた。

「怖いのか。莫迦だなあ。僕と一緒にだもの、大丈夫だつて」

それでも尙女は、臺と水面との高さを瞶めながら、無言でゐる。

彼はふいと起ち上つた。

「嫌やか!」

嚴肅な顏色で、彼は女を見おろした。

「嫌やなら嫌やでもいいさ。——愚圖な女だな」

そして彼は、獨りで起重機の臺に飛び上ると、兩手を腰に當てて、海水浴場の方を眺め始めた。

「兄さん!」

暫らくの後、臺の下で女の小さく呼ぶ聲がする。

「兄さんてば! わたしもあがらして……」

彼は素氣のない顏で振向いた。女は起重機の脚に捉まつて、男を見上げ乍ら甘える。

「ねえ、如何してあがるのよ?」

「それに捉まつてあがれば可い」

「でも——」

女は淫らな恰好に唇を曲げて、積石の方を偸み見た。若者は彼方を瞶めた儘、ぼんやりと佇んでゐる。

「ちよいと、極りが惡いのね」

彼女は夫れから、仔犬の如うにむくむくと體を動かして、セメントの壁を攀ぢ登るのに蹠いた。彼が女の腕を摑んで引上げてやつた。臺にあがると女は彼に體を擦りつけてきた。そして何氣ない聲で云ふ。

「まあ、ずゐぶんゐるのねえ、こちらから見ると。大變な人だわ」

彼の手を握ると、女は亦云つた。

怎うして、兄さんばかりふいと此方へ來て終つたの？」
「不愉快になつたからさ」
「さう！」
女は俯向いて足を重ねた。
「妾も嫌やだつたわ。生意氣よ、未だ小娘の癖して……」
「全くだ」
半ば歎息するやうに、半ば巫山戯た調子で彼は續けた。
「やつ張、おまへとふたりつきりでゐるのがいち番いい」
「……」
女は男の手を握り締め、それに縋るやうにして含み笑を發した。
兩人は寄り添つて、臺下の靜かな、草色の海面を瞰下した。
「そら、些つともこはいことなんかないだらう！」
女は微に肯く。
「……けど、飛び込んだらあと如何してあがるの？」
「あの綱に捉まつてあがるのさ。落着いてさへ飛び込めば、何有、何でもないのだよ。間違つたつて情死だ」
彼は笑ひながら、水面まで弛んでゐる鐵綱を指した。綱は起重機の脚から、二三間先の小舟に繫つてゐる。
女は稍安堵したやうな顔をして、一層堅く手を握つた。
「腕を組むか」
女は何とも答へない。不自然な程、彼女の兩脚は自然りでに烈しく慄へてゐる。
趾頭を揃へようとすると、女は後退りし始めた。そして奴隷が嚴しい主人を見上る時のやうな眸附をして、彼女はおづおづと彼に云つた。
「ねえ、もつと低い所からにしませうよ！」
けれど彼は腕の緊縮を弛めなかつた。
「高ければ高いだけ、氣持が好いのだ」
女は曳きずられた。爭ふ餘地がない程臺は狹い。
竟に彼女の重い體が臺を離れようとした時、絕望的な悲鳴をあげて、彼女は男に抱きついた。縺れ合つた男女の胴體は、水面と平行に、凄じい水音をたてて落ち込んだ。
百姓の若者は、吃驚して臺の下に走つて來た。女の茶色の海水帽が、直きに沈んで見えなくなつた。
驚愕した男の顏が、泡だつた水面を突き拔けて現れ出た。若者の影がちらと彼の眼に映ると、彼は齒を剝き出して何事か叫ばうとした。海水が忽ち口内に浸入してくる。
一瞬時！　全く豫期しなかつた恐怖に色を失つた彼の顏は、彼の脚に獅嚙みついて奈落に曳きずつて行かうとする致命的な牽引の力に抵抗する最後の努力で、醜くひき歪んだ。

長い彼の頭髪が、總(ふさ)のやうに開いて水面に漂ふ。二三度蟹のやうに筋張つた手が、水中から延び出て、空しく水上を摸索した。

綱を越えて、一搖の波が寄つて來た。水面は再び靜かに、草色に澄んだ。

お仙

人々はお仙を村のもちものにした。のんだくれのその父親がくたばつてしまへば、誰に遠慮することもいらない。

もつとも表面彼女は、ひきとられた地主の傭人となつてゐる。しかしそのために農事の忙しい場合、人々が彼女をかりて使ふのを碍げられるといふことはないのだ。

さうした折にはお仙は、その働きを二倍にするであらう。主家の仕事も手落ちなくすまし、頼まれた家の手傳もみごとにやつてのける。お仙は申分のない奴隷である。

つまり彼女の育つた境遇がよかつたのである。お仙の母親は彼女が生れおちるとから、娘の教育に容赦しなかつた。お仙はいつも豆のやうにひつぱたかれ、おそろしい怒號と罵詈とで練りあげられた。そしてその母親が、中途で亭主ののんだくれを口實に、駈落ちをしてゐなくなると、こんどは彼女の父親が後をひき續いだ。

彼はその後一層大變なよつぱらひとなつて、孤獨と貧乏とに退屈した時には、娘をひつとらへて彼の脚の力を試してみることにした。稚い娘は彼の逞しい一撃に、ひとたまりもなくふつ飛んでしまふ。そして壁土のへこむほど、頭をぶつつけてひどくべそをかくのである。

泣き出したら父はますます恐悅して、娘の手足を縛り、兎のやうに天井に逆さ吊りにして樂むであらう。食の足らない彼女が、さういふ馴れない姿勢をとらされたら、いつぺんに眼をまはして了ふことはたしかである。

いはばお仙は兩親の手脚に鍛へられて、胡桃のやうに堅く成長したやうなものである。奴隷としてこれ以上素晴らしい教養があるであらうか。彼女が從順で忍耐强く、仕事に巧みであるのも自然である。彼女の働いたあとを調べてみるがいい、蝸牛の動いた跡のやうに、明瞭に他から區別することが出來る。

主人にとつても、また村人にとつてもお仙は、思ひがけないひろひ物であつた。後から考へてみれば、彼等はもうすこし、この天からの贈物を大切にすべきであつたらう。併しなにごとにも無考な村の若者達が、その尊い代物を臺なしにして了つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.